



高村光雲とその時代展

予告：鈴木春信 - 江戸のカラリスト登場

夏から秋のコレクション展

「老猿」の気概

今年の梅雨は本格的に過ぎるほどで、まるでお風呂場にもいるかのような、むしむしとして暑い日々が続きました。日本と韓国で行われたサッカーのワールドカップにおいて、ヨーロッパ勢が苦戦を強いられたのも、この東アジアモンスーン地帯特有の天候が一つの原因であったことでしょう。

この時期は、美術館も頭を悩まされることが多くなります。観客の皆様は足元が悪くなり、折角の美術鑑賞に向かおうとする気持が萎えてしまいがちなのも問題ですが、同時にまた、高い湿度という難敵が挑戦してくるのです。美術品はおおむね湿気を嫌いますから、通常は60%の湿度を目安として調整しています。ところが、湿度を下げようとする自然に温度の方も低くなってしまいがちで、時には館内が寒すぎるということにもなるわけです。お客様に快適な環境でご覧いただくために、湿度計や温度計とにらめっこしながら、裏方の館員たちは始終気をもんでおりました。

その間の「アンジェ美術館展」は、にもかかわらずお蔭さまで多くの方々に熱心にご覧いただき、多少の努力も報われて幸いでした。ルーブル美術館と並んで歴史の古いアンジェ美術館から、ロココ絵画を中心とするフランスやイタリアの本格的な美術作品をお借りしたこの展覧会では、いつもより多く中年以上のご夫婦が連れ立ってお出でになるなど、ほほえましい光景をしばしばお見受けしました。いわゆる泰西名画の数々をガラスケースもなく間近に鑑賞でき、主として大理石による彫刻の逸品にも直接向き合うことのできる館内の雰囲気はまことになごやかで、楽しい会話も多く聞こえ、見回りながら私自身が幸せな気分を味わわせていただいたものです。

もちろん若い方々の来館にも恵まれましたが、その点においては、春の特別展「ジ・エッセンシャル」において、はっきりとした傾向が認められました。アンケート調査にご協力をいただいたところ、回答者の半数以上は10代、20代の学生さんたちで、自由表記のご意見を讀ませていただいて、彼らの現代美術に対する熱い思いをひしひしと感じさせられたものです。

公立美術館の使命として、さまざまな世代や環境に分かれる市民にそれぞれ興味を持っていただけるように、年間の展示計

画を組み立てているつもりです。お好みに合わせて気軽にお運びをいただければと思います。

さて、7月16日からは、本年度第3弾目の企画、「高村光雲とその時代展」が開催されております。

高村光雲といえば、上野の山の「西郷隆盛像」や皇居前広場の「楠正成像」の作者として知られる彫刻家です。それらは銅像なので、正確には原作の木彫像を制作した人というべきでしょう。代表作のそれら巨大な銅像はもちろん会場に運ばませんが、もう一つの代表作「老猿」は、東京国立博物館の特別のご好意で、8月25日までの会期中いっぱい展示が可能となりました。多くの教科書に載っていて誰にも親しいこの大きな木彫りの作品に、面と向かってどのような感銘を受けていただけるか、今からその反応を楽しみにしているところです。とりわけ夏休みの期間にかかっているので、小学生、中学生の皆さんにぜひとも見ていただきたいと思っています。

1893年(明治26年)に、数え年42歳の高村光雲がこの作品を制作したのは、米国のシカゴで行われた万国博覧会に出品するためでした。欧米人に向かって「日本彫刻ここにあり」という意気込みで彫られたこの老猿は、空を見上げてにらみつけるその表情に、ただならない気迫が込められています。

明治以前の絵画や彫り物にあっては、猿は、鷹や鷲などの猛禽に襲われる弱い動物として表されたものです。しかしここでは、よく見ると猿の左手に鷹の羽が握られており、負けじと逆襲して追い払った後の姿と知られるのです。力が強くていじめ役の鷹を欧米や中国などの列強に、猿を新興の小国日本に、それぞれ見立てての、万博出品物であったのかも知れません。制

作の翌年には日清戦争も勃発しているような緊迫した情勢の中で、明治日本の気概を世界に示したものと言えるでしょう。

ところで、千葉市美術館では新しい試みとして、この夏休み、市内の小・中学生を対象に、学習相談日を設けることにしました。5日間と日を限らせていただきますが、現役の先生方にもご協力をいただいて、絵や彫刻など美術の自主制作をどのように行えばよいか、学童と一緒に解決する機会を設けます。親子連れでのご来館を心からお待ちしています。 館長 小林 忠



高村光雲《老猿》1893年 東京国立博物館蔵 撮影:高村規

高村光雲のこと

江戸と東京は地続きではない。

横丁の路地を抜けたら、そこが江戸だった - というのは下手なSFでもそんなには見られない。江戸はどこまで行っても江戸でしかない。

あたり前の話であるが、ひとの心はそうは行かない。お上が江戸を東京と呼び改め、暮らしも随分変わったが、心にちょんまげをのせた人間が大勢暮らしている、それが光雲の見ていた御一新からこのかたの「江戸」だった。彼もまた、心に鬻を結っていたひとりである。光雲が後半生に得た栄光と悲劇は、このことが原因となっている。

光雲は自分の彫物(ほりもの)の技倆、腕一本で世の中を渡って行った。輸出向けの象牙彫りが流行しても、おのれが信じる木彫りの道を歩み、師匠から受け継いだ代々の技を守り通した。頑固な職人だった。しかし、ただ頑固なだけではなかった。世の趣向が写実に向けば、そのこつを自分で学び、覚た技を生かして世間をうならせた。光雲が幕末ではなく、江戸のはじめごろ日光東照宮の造営にでも参加していれば、腕のたつひとりの職人としてしあわせな一生を終えられたに違いない。

ひとつの作物をこしらえるために、自分の技を精一杯盛り込んで、人様に喜んでもらう。これが、光雲の生きがいであった。「芸」の妙味であろう。彼の作ったものにはそのような工夫が随所に見られる。犬の毛並みの精緻さ、雅楽の装束、どれもみな彼の工夫が光っている。弟子たちも彼を見習い、それぞれの修業にはげんでいた。行く末は、高村家が木彫の中心になる、そう誰もが信じていた矢先、思いもかけないところから矢が飛んできた。

矢を放ったのは、いずれは自分の後を継いで高村の家を背負って行かねばならない長子の光太郎(1883 - 1956)である。子は、父が当然と思っていた心の鬻を嫌い、あまつさえ父の作物に見られる「芸」を痛烈に批判した。父が気がついた時、子はさっさと自分で鬻を落としていたのだった。歿後、今日にいたるまで光雲の作物の歴史的な評価(市場のそれは異なる)が意外なほどに低かった理由は、光太郎の批判が後世の人間に受け入れられたことが大きい。子は、親の作物ではない。

親不孝者め。そう光雲が思っても当然だったはずなのに、彼の側の記録からは子に対するそんな父の思いは読み取れない。遣された多くの木彫と晩年の回顧談(1929年)を通して、大変な世の中を生きていかねばならなかった一人の庶民の姿がただ浮かび上がってくるばかりである。心に、ちょんまげをのせた通りの男の姿が。

学芸員 藁科英也



高村光雲《洋犬の首》1877年
個人蔵 撮影:高村規



高村光雲《鳩》1926年 個人蔵 撮影:高村規



佐藤朝山《冬眠》1928年
個人蔵

高村光雲とその時代展

2002(平成14)年7月16日(火) - 8月25日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般800(640)円

大学・高校生560(450)円

中・小学生240(200)円()内は前売・団体30名以上の料金

前売券はJR東日本びゅうプラザ(8月25日まで)

千葉市美術館ミュージアムショップで発売

*8月いっぱい、千葉市内の小中学生は無料

【主催】 千葉市美術館 / 読売新聞社 / 美術館連絡協議会

【協賛】 花王株式会社

講演会

「光雲と《老猿》」

講師：岩佐光晴氏(東京国立博物館彫刻室長)

8月3日(土)午後2時より(開場：午後1時30分)

11階講堂にて

参加無料

夏から秋のコレクション展

所蔵作品展だけなら入場料は大人200円です

千葉市美術館新収蔵作品展

収集をめぐる8つのいとなみ

7月20日(土)・9月8日(日)

平成7年11月に開館した千葉市美術館の所蔵作品の収集は、平成2年度から本格的に開始されており、「千葉市を中心とした房総ゆかりの美術」「日本美術の核を形成する近世以降の美術」「現代美術」の3つの基本方針に沿って活動を続けてまいりました。この展覧会では、平成13年度に新たに収集した作品のなかから、第一弾として、御寄贈を受けた鈴木コレクションの屏風絵を中心に、41件の作品を展示公開いたします。併せて、今回初の趣向として、「8つのいとなみ」と題し、収集活動をめぐるさまざまな局面の一部をご紹介しますこととしました。作品の数だけ収集をめぐる物語が紡がれ蓄積されて今日の美術館活動を支える力となっています。「1.受贈」「2.揃える」「3.補完する」「4.新しいコレクションを」「5.千葉市美術館だけの・・・」「6.発見する」「7.展覧会がとりもつ縁」「8.手から手へ」という8つのエピソードを通じ、このたび千葉市美術館のコレクションに加わることとなった作品が、これまでたどってきた道筋にも思いを馳せつつご鑑賞お楽しみいただければ幸いです。8階展示室で開催します。(ma)



『蜀山人図巻名蹟集』より
葛飾北斎「若家図」
享和・文化年間

森徹山《春秋花鳥図屏風》鈴木民三氏寄贈



千葉市美術館所蔵作品展

円山応挙 - 近代日本画の源流 - / 現代の造形

9月3日(火)・10月14日(祝・月)

9月からの所蔵作品展です。7階の展示室をふたつに区切り、展示室6,7,8では「円山応挙」。応挙(1733 - 1795)は江戸時代中期に、京都で活躍した画家です。眼鏡絵として伝わった透視遠近法を取り入れ、写生を活かした、親しみやすく写実的な画風は弟子たちに受けつがれ、近代日本画の基礎となりました。12年度に収集し、修復が完成した旧円満院雪之間襖絵19面を中心に円山応挙の作品を展示し、合わせて同時代の岸派の作品、円山応挙の弟子たちが挿画を描いた版本、応挙の流れを汲む近代日本画も展示します。

また、展示室5では「現代の造形」と題し、近年収蔵したが公開する機会がなかった絵画、立体作品、写真作品などを展示します。立体的作品としては鈴木治「一本ノ木」、土谷武「SR24の試み」、そして写真を使うドイツのアーティスト、トーマス・シュトゥールートの「Strasse」(街路)、若林奮の版画「Underwood」などを展示する予定です。(i)



円山応挙《山水図襖》(部分)
旧円満院雪之間襖絵
明和期



鈴木治《一本ノ木》
1988(平成10)年
土(泥象)

新収蔵作品展I「収集をめぐる8つのいとなみ」

所蔵作品展「円山応挙 - 近代日本画の源流 - / 現代の造形」

【休館日】毎週月曜日 但し9月16日・23日、10月14日(休)は開館。翌火曜日休館

【入場料】一般200(160)円 大学・高校生150(120)円 中・小学生100(80)円

()内は30名以上の団体

同時開催の企画展をご覧の方は、この展覧会を無料でご覧になれます。

9月3日-8日の間は、この料金で両方の展示をご覧になれます。

青春の浮世絵師 鈴木春信 - 江戸のカラリスト登場



《夜の梅》メトロポリタン美術館蔵

再三お知らせしている通り、今秋の特別展は、いよいよ待望の鈴木春信。屈指の企画力を誇る千葉市美術館が開催する世界から期待を集めている展覧会です。詳細は次号にまかせますが、担当の学芸員は目下最後の交渉や印刷物の準備に余念がありません。



《坐鋪八景 扇晴嵐》シカゴ美術館蔵



《三味線をひく男女》ミネアポリス美術館蔵

9月14日(土) - 10月20日(日)

鈴木春信(1725?-1770)は、錦絵創始期の第一人者として知られる浮世絵師です。人気絵師として活躍したのは没するまでのわずか5、6年ほどでしたが、おそらくは1000図以上を数えるとされる優れた浮世絵版画を世に送りだしています。

春信は小さな画面の中に、詩的で洗練されたイメージと江戸っ子らしい洒落の世界を豊かに築き上げました。古典文学に多くテーマの発想を求めた春信の作品は、江戸時代その当時のさりげない風俗のありさまを描いていても、たとえば平安時代の雅びやかさを感じさせる格調の高さがあり、古く和歌などに表されてきた日本人の季節感や恋心を現出するかのような気分があります。

そしてこの時代に色数の多い木版画が摺られるようになり、あざやかな色彩の錦絵が誕生したことは、当時の人々にとって衝撃的なメディア改革であったことでしょう。

「雪中相合傘」、「坐鋪八景」の8枚揃、「夜の梅」などは多くの人に愛される春信の代表作ですが、そのほとんどが海外美術館にあることから、ながく切望されながらも本格的な春信の展覧会はこれまで実現されませんでした。春信デビュー当時の貴重な資料から代表作まで、海外の美術館に所蔵される多くの作品がはじめて里帰りし、265点の選りすぐりの作品が一堂に会するこのまたとない機会に、春信芸術の粋を是非ご堪能ください。(ta)

* 詳細は来号に掲載。会期中展示替がありますのでご注意ください。



《雪中相合傘》メトロポリタン美術館蔵



《秋の風》ボストン美術館蔵

夏休みの課題は...美術館で解決

小学生・中学生のための^{すがこうさくがくしゅうそうだん}図画工作学習相談のお知らせ

楽しい夏休みも半分が過ぎるくらいになると、学校に通う子供たちの毎日に小さな暗い陰がのしかかりはじめ、それが毎日少しずつおおきくなります。その正体...、誰にでも覚えがあるでしょう。夏休みの宿題です。

算数や漢字のドリルはお友達と協力しあって何とかしていただくとしまして、人のアイデアを拝借するとすぐにばれてしまうのが、図画工作や美術の課題でしょう。2学期の始業式には、何とか、個性的な成果を携えて、暗い気持ちにならずに登校したいものです。とはいっても、絵や工作が好きで次々にアイデアが飛び出すお子さまはいいかもしれませんが、苦手な人には、大変なこと。一体、なにをどうしたらいいのか、その手掛かりさえつかめません。安心して下さい。そんな子供たち、そしてご父兄の皆様は朗報です。千葉市美術館では、今夏、「図画工作学習相談」と銘打ち、子供たちのための相談日を設けました。内容は下記のとおり、子供たちが実際に困っていることを鑑みた具体的な内容です。相談にのるのは、千葉市内で教鞭をとる図工、美術のベテランの先生がたです。みんなの、つくろうという気持ちを大切に、話し合いながら問題を解決してゆきましょう。

学習相談の日程

1 《テーマを決めかねている人》

- 何をどのような手順でつくるか決める

8月7日,8日 10:00 - 12:00,13:00 - 16:00

2 《作品に満足できない人》

- 何をどのように直したらよいか見つける

できるだけ作品を持参して下さい

8月22日 10:00 - 12:00

8月23日,24日 10:00 - 12:00,13:00 - 16:00

上記1,2の問題にかかわらず、図工、美術の学習についての相談は何でも応じます。

どうぞ遠慮なさらずにいらして下さい。相談は無料です。

尚、小学校低学年のみなさんは、保護者、兄姉、上級生のいずれかと一緒にいらして下さいようお願い致します。

場所 千葉市美術館講座室2 (9階)

問い合わせは 千葉市美術館(043-221-2311)まで

*尚、夏休み期間中、千葉市内の小中学生は展覧会(「高村光雲とその時代展」)の入場が無料です。合わせてご覧下さい。

展覧会やイベントの日程や名称は現時点での予定です。まれに変更される場合があります。また、入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは下記へお問い合わせ下さい。ホームページでは最新の情報がご覧になれます。

休館日 毎週月曜(祝日の場合はその翌日) 年末年始 展示替期間

開館時間 午前10:00 - 午後18:00 平日の金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

お問い合わせは 043 - 221 - 2311(代) これまでご利用頂きましたNTTハローダイヤルは3月末いっぱいでご使用頂けなくなりましたのでご注意ください。

URL <http://www.city.chiba.jp/art>

e-mail museum@city.chiba.jp

千葉郊外のニュータウンを舞台に「菜の花里美発見展」

アートユニバーシアード 「菜の花里美発見展」開催

和世ゼミなど、美術界建築界でも今はときめくメンバーが勢揃い。かれらが中心に、若者の実行力と組織力を発揮すればよもや「学園祭」に駄する懸念はない。既に各地域では説明会やワークショップが繰り返し行われているとのこと。地域社会に展開しようというグループは自治会や当局、学校のガードが固く、交渉が一筋縄ではいかない模様。「千葉で美術館やってくるのも大変でしょう」と、逆に、私たちに同情する人もいた。

このイベントは、外部からの来訪者に期待する経済効果追求型イベントではなく、あくまでも地域の住民、子供たち、といったコミュニティを主対象としている。芸術家や学者、学生が自分たちのためだけでなく、この私たちの千葉の新住民と協働しようという姿勢は評価される。それでも数々のコンフリクトは避けられないだろう。平和な住宅地を喧噪にさらしたくない、スポンサーであるデベロッパーの販売促進に利用されているのではないが、等々。しかし、まず役得や保身を

頭で考えるおとなと違い、ワークショップに参加した子供たちは大喜びと聞いた。成る程子供が喜びそうなプランが多い。こんな贅沢な機会が与えられる地域の彼らは幸いだと思う。そして大人も学生も、葛藤や軋轢を通じて多大な経験を得るのではないだろうか。(ha)



母袋俊也研究室(東京造形大学)《伝言板プロジェクト》予想図
(市内緑区あすみが丘の公園5ヶ所に設置予定)
テーマ別の様々な形の伝言板を設置、情報交換の古くて新しい形態を提案する

マスコミ関係の人などからよく聞かされるのが、「千葉は文化が不毛の場所だから…」という枕詞。戦後になってから著しく発展した衛星都市の千葉は、比較の問題ではあるが、たしかに近世以前から引き継がれた文化はあまりない土地柄だ。

市内には昭和30年代後半以降になってから湾岸の幸町や高洲、内陸の小倉台、千城台など大規模な団地が造成され人口も増加を続けた。宅地開発は市内南部では近年まで続き、「チバリーヒルズ」の存在で全国にその名を馳せたあすみが丘、おゆみ野や、市原市へとまたがるちはら台などの大規模な住宅地にはまだまだ新住民が移り住みつつある。多くの人が京葉圏へと通勤するニュータウンだ。私たち美術館も、新しい仲間たちに「成る程不毛!」などと妙な納得のされかたをしないよう、良質な企画と作品を紹介し続けなければならない。

最近、その郊外の住宅地を舞台とするちょっぴり変わった情報が流れてきた。それはこのニュータウンを舞台に、今年の夏休みに開催されるアートイベント「菜の花里美発見展」。このイベント主宰するのは一昨年の越後妻有アートトリエンナーレ、ファーレ立川などで知られる北川フラム氏。開催要項によると、「アートユニバーシアード」は「コミュニティデザイン」「街なか劇場」「コミュニティ出前講座」という3つのプログラムからなる。美術建築関係の23大学39ゼミの先生と学生による「コミュニティデザイン」は参加型街作り。「出前講座」は町の各所に教室を設け芸術に限らぬ様々な分野の「理想の学校」をつくる催し。目下400名を超える学生達を中心に準備が進められつつあり、このニュースが発刊されるころにはイベントも山場にさしかかっているだろう。参加メンバーを見ると、今春の「ジ・エッセンシャル」で観客を魅了した逢坂卓郎さんのゼミ、館に収蔵作品もある佐藤時啓さんのゼミ、建築家妹島

菜の花里美発見展 アートユニバーシアード

2002年8月1日(木) - 9月8日(日)

近郊の緑区おゆみ野、ちはら台、あすみが丘、季美の森を会場として開催
各プログラムの詳細、現場付近の地図をホームページで公開している。
<http://www.nanohanasatomi.com>

主催:「菜の花里美発見展 アートユニバーシアード 実行推進委員会」
ディレクター:北川フラム
後援:千葉県、千葉市、市原市、東金市、大網白里町、各市町教育委員会、
千葉県商工会議所連合会

特別協賛:都市基盤整備公団、東急不動産株式会社、株式会社エルカクエイ
協賛:日本精蠟株式会社、株式会社ルミカ、ユニチカ株式会社
問い合わせ先:同展事務局 電話03-3476-4868(アートフロントギャラリー内)

展示室で考える

アンケートの効用

よく展示室の出口あたりに、アンケート用紙が置いてあります。皆さんはこういった調査に協力されるほうでしょうか。年齢職業や住所などいくつかの質問項目があって、最後の方に、意見感想を記入する欄があるのがその一般的なスタイル。回答者の連絡先を記入する欄がある場合もあります。どこの美術館でもあまり大きな違いはないようです。千葉市美術館でも多くの展覧会では、このような形式のアンケートを行っています。ではその結果がどのように扱われるのか。それが気になるところです。お答え頂いた結果は、当然データとして集計します。これまでの経験から、実際に活用するには500件程の回答が必要ですが、皆様が記入頂いた500件の手書きデータを効率的に役立てるため、データベースソフトに入力するのは、かなり大変な作業です。職員が山積みの日常業務の合間に、間違えの起こらないように丹念に入力していきますが、集計がすむのは展覧会終了後半年もたってしまうこともあります。個人情報が含まれるこの時点のデータには、集計担当者以外アクセス出来ません。OCR化（マークシート式）なども考えたいところですが、読み取りの機器はまだ高価ですし、筆記だからこそ書いて頂いたかけがえのないご意見も随分あります。

このデータは集計さえ済めば早速、広報計画や今後の活動に活かされることになります。広報では、皆様のもとへ早く正確に情報を発信するため、例えば、20代の来館者はどんな雑誌で美術の情報を得るか、それと比較して30代はどんな方法を情報源とするのか分析します。情報がよく行き渡るメディア、そうでないメディアも見分かります。たとえば5紙の新聞にほぼ等しい大きさの扱いで記事が掲載された時、どの新聞を読んで来た人が一番多かったか、これは新聞の発行部数とは比例しません。駅貼りポスターやちらしがどれくらい見て頂いたかも読みとれます。また展覧会の内容についてのご意見は私たちににとっての励みとなり、かつ潜在的な需要も読みとれます。職員の態度についての意見は、早速運営に反映できる項目です。施設のハード面については、予算が必要な問題が多いので即座に反映できることは少ないが、課題として蓄積しなければなりません。

さて問題点ですが、これは任意調査、つまり回答をいささかも強制しているわけではないので、回答者が数多くの来館者のなかでも協力的な方、つまりもとより美術館に好意的な方と、何か特に不満を覚え、それを訴えたい方の両極に偏る点です。意見を回収する目的にはかなうが、データを分析するには客観性を欠いたサンプルの集合となりがちです。例えば、下記のデータでは20代以下の来館者が半数以上という、日本の将来には極めて明るい結果を残しています。これにしても、職業のある人に較べれば、時間的にアンケートに協力する余裕のある学生さんの回答率が高かった結果かも知れません。若い人ほど、抽選で当選するプレゼントの絵はがきにつられるのかも知れません。いずれにせよ完全な客観性があるとはいえませんし、その誤差を修正する係数などどこにもありません。偏りのない結果を得るには、曜日や時間とは無関係に、調査に協力的か否かも度外視し、出口通過5人毎とかの方法で無作為に抽出した来館者をお願いしなければならない。しかし展覧会の期間中、出口に職員が常駐するのは多忙な美術館業務のなかでは非現実的。目下計画中のボランティアをお願いするなど、今後の課題でもあるでしょう。それでも、来館者の住所分布、どんなメディアで展覧会を知ったか等々は、問題のないデータと思われる。そしてその結果のうちの数量的なものは、やはり出来る限り公表するのが回答者へのマナー、今日の常識となりつつあります。先般の展覧会「ジ・エッセンシャル」のアンケート結果概要を下にまとめました。上記のとおり、職員が多忙な業務と平行しているため、いつも速やかに公表できるとは限らないのが悩みの種ですが。

このアンケートですが、説得力のあるご意見は職員の記憶に刻み込まれ、可能な項目は何らかのかたちで美術館活動に反映されるものです。受付で用紙を渡されたら、出来る限りご協力頂けると嬉しく思います。(ha)

「ジ・エッセンシャル」アンケート回収結果の概要

入場者数 4271名 そのうち回答をお願いしたのは4071名
回答数 529件(対象7.7人に1人が回答)
年齢 10代以下16.3% 20代49.1% 30代18.3% 40代7.2% 50代4.0% 60代3.2% 70代以上1.0% 不明0.9%
男女比 男35.7% 女63.5% 不明0.8%
住所 千葉市内29.3% 千葉市以外69.8% 不明0.9%
職種 学生40.8% 会社員28.2% 自由業6.8% 公務員5.5%
自営業1.5% その他14.0% 不明3.2%
情報ソース人から聞いて123件 ちらし119件 雑誌107件 新聞78件
ポスター74件 友の会から18件 市政だより8件 その他22件
(複数回答可)
意見感想 506名(95.7%)の方が何らかの意見感想を記入。
そのうち485件(95.8%)は、展覧会や当館に対して肯定的なご意見でした。また展覧会が面白くなかった、入場料が高い等の否定的なご意見は12件(2.4%)頂きました。

千葉市美術館

お問合せ：043-221-2311 ホームページ：<http://www.city.chiba.jp/art>

JR千葉駅東口より

徒歩約15分

バスのりば⑦より京成バス「大和橋」下車徒歩2分

千葉都市モノレール県庁前行「葭川公園」下車徒歩5分

京成電鉄千葉中央駅東口より徒歩約10分



千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

【編集・発行】千葉市美術館 〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】2002年7月25日

【制作・印刷】株式会社プリンテックメディア